

【R 雲仙市-国見エリア Unzen City-Kunimi Area】



田代原高原の放牧草原から(九千部岳・吾妻岳・鳥甲山)

雲仙市-国見エリアでは、“北面の雲仙岳”が眺望できます。小中学校の校歌には雲仙岳が登場し、地域で古くから親しまれてきたことが分かります。雲仙岳の山岳信仰が盛んであった往時をしのばせるものとして、温泉神社の分社が3社(神代(こうじろ)・土黒(ひじくろ)・多比良(たいら)温泉神社)、現存しています。山並みとしては、眉山～平成新山・普賢岳・国見岳～九千部岳・吾妻岳～鉢巻山の並びで多くの山々が見えますが、当エリアに山頂を持つ山は九千部岳と鳥甲(とりかぶと)山です。(※旧国見町の名は、雲仙岳主峰群の中で当エリア側にそびえる国見岳に由来します。)

九千部岳は、701年に雲仙岳の山岳宗教を開いた僧・行基が修行を行ったと伝えられる山です。山名の由来ですが、僧・行基が九千部岳山頂で一万部のお経を読む修行をしていた際、鳥甲山から見ていた赤岩観音が行基の決意を確かめようと、美しい姫に化けて九千部岳へと歩いてみたところ、あと一部というところで気が緩んで姫に見とれ、読めなくなった、という伝説に由来します。鳥甲山は、鳥のときかのように山頂部が三角形をしており、また背面にはNTTの電波塔を背負っていて、遠く沖合のフェリーからも視認できます(↓)。

この九千部岳と鳥甲山の間には、J字状の谷地形があり(↑)、これが島原半島北部を東西に横断する“千々石(ちぢわ)断層”で、高低差最大450mにも達します。J字状の底の平地は田代原(たしろばる)高原と呼ばれています。島原半島では、江戸時代から昭和初期(国立公園指定時)まで、雲仙岳一帯で牛馬の放牧が行われていた歴史があり、その中心地がここ田代原高原でした。その放牧によって守られていたものが、広大な草原とミヤマキリシマ群落(有毒で牛馬が食べない)で、現在でも国立公園指定当時の“放牧牛・草原・ミヤマキリシマ群落のセット景観”が見られる場所は、田代原高原のみです。

島原半島には、雲仙岳の化身とされる巨人にまつわる伝説が多く伝わっており、有名なものは“みそ五郎”ですが、当エリアでは“大五郎(うーごろう)”という巨人の伝説が伝わっています。時に噴火しながら様々な恵みをもたらす雲仙岳に、人々が巨人のような力を感じていたのでしょう。

当エリアの神代地区は、江戸時代、隣の瑞穂エリアの伊古・古部地区と共に、実は佐賀鍋島藩の飛び地領となっていました。神代地区には神代鍋島氏の陣屋(鍋島邸)が置かれ、雲仙岳山中での林業振興を行うなど独自の政策が行われました。現在では、神代小路(くうじ)歴史文化公園として整備されており、ここからも雲仙岳の山並みを眺めることができます(↓)。

雲仙岳の様々な表情を探しながら、国見エリアを旅してみませんか？

●国見エリアの観光情報はこちら↓

雲仙市観光物産課(ガイドブック) http://www.city.unzen.nagasaki.jp/info/prev.asp?fol_id=10176



神代の市街地から(北から)



鳥兎(うと)山とも呼ばれる鳥甲山



神代小路歴史文化公園から



百花台公園のお城の上から